



# 感情を測る機械

greentea0117

### 感情を測る機械

感情を測る機械というのができた。多分嘘発見器のようなものだ。両手首に黒い布状のものをマジックテープで巻き付け、質問に答えるのだ。これは何のための機械かと言えば、自分を知るための機械だという。自分のことはわかっているようでわかっていないもの。それでこのような製品を開発し、結果をその後の人生にいかしてもらいたい、そんな狙いだ。

私はこの機械の診断を受けることにした。特に毎日不自由をしているわけではない。この機械にうさん臭さを感じたからだ。機械が人の何がわかるのかと思った。であれば、診断など受けなければいいのだが、なぜかどうしてもこの機械の無能さを証明しないと気が済まないような気分になったのだった。

その機械はとある研究センターにあった。予約を入れ料金を払えば、だれでも診断を受けることができる。私はすぐに小さな部屋に通された。そこには白衣を着た女性と机と、感情を測る機械とおぼしきもののみがあった。あとはすべて、床も壁も天井も真っ白で、窓も無かった。

「川口頼子さん、ですね。スタッフの瀬木です。どうぞこちらへ」

私は椅子に座り、血圧を測るような黒い布を手首につけられた。

「それではいまからいくつか質問をします。答えてください。別に何もかも正直に答える必要はありません。大切なのはリラックスしていただくということです」

なんだか要領を得ない話し方だ。正直でなくてもいいというのはどういうことだろう。

「川口さん。お年は三十五ですね」

「そうです」

「出身は三重県ですね」

「そうです」

「大学をお出になっていますね」

「そうです」

机に置かれた機械は何本もの針を揺らめかせ、緩やかな曲線を描き出している。これはまさにテレビで見た嘘発見器そのものじゃないか。それからしばらく間があった。

「それではこれから、自分の性格について思いつくままに述べてください。そうですね、まず深呼吸しましょうか」

私は質問に戸惑いながらも、深呼吸をする。

「思いつくままでいいんです。もちろんお話になりたくないことを話す必要はありません」

自分の性格について。あえてあんまり考えたことがない。でもそういえば、

「疑り深い性格かもしれません。実はこの機械のことも信じてません。ロボットが感情を測れるなんて、ナンセンスです」

針は今どんな波形を描いているのだろう。一体それをどうやって読むのだろう。

「なるほど。他には？」

「さあ、会社ではあまり頼りにされてません。時々ミスをするので。でもまあ頼りにされると仕事も増えるし、別にいいです」

「なるほど」

「この機械、大丈夫ですか？ 私が言ってることが嘘か本当かを判断しているんですか？」

「いいえ違います」

瀬木さんは穏やかに答える。

「あなたが話している内容は、さほど重要ではないですよ。それが本当かどうか。その間のあなたの感情の動きを測っているんです」

## 感情を測る機械

---

よくはわからなかったが、私は質問の口を閉じた。

「別に私が質問する必要もないんです。川口さんが思うままに話してくださって、大丈夫です」  
思うままにと言われても困る。見知らぬ女性と嘘発見器のような機械を前に、一体何を話せというのか。

「そもそも私はこんなに疑り深い性格ではなかったように思います」

それでも私は話し始めた。

「きっと十年前の私なら、新聞で感情を測る機械のことを読んでも、へえすごい、で終わっていたと思います。十年の間に疑り深くなりました」

「そうですか」

瀬木さんは相槌を打つ。

「わざわざ出かけて行ってその機械を試すようなことも、十年前ならなかったでしょう」

「なるほど」

「いいことなのかわるいことなのかわかりませんが」

相槌がないのでふりかえると、瀬木さんは何かを書き込みながら少し笑っていた。

「もうそろそろ『私の感情を測る』ことはできたでしょうか」

「いいえ、もう少し話を聞かせてください」

瀬木さんは言った。

「そうですね。ここ最近、一番うれしかったことはなんですか」

「うれしかったこと……。毎日同じことの繰り返しなので嫌になるけど、まあ健康に働けているのでそれが一番いいのかなと。そういえばこの前バーゲンでセーターを買いましたね。三千円で。ウールー〇〇パーセントのセーターがですよ。デザインだってわるくない。ざっくりして着やすい。まだ買ったばかりなのでわからないけど、すぐに毛玉ができないことを祈るばかりです」

「なるほど」

何かを書き込んでいる気配。

「それでは最後の質問ですが、秋について思うことをなんでも述べてください」

「秋、ですか？　さんまがおいしい季節なのでうれしいです。最近は大いぶ涼しくなりましたね。他に食べたいものと言えば、焼き芋、焼きそば、コロツケ、あとは甘いものですね。甘いものについても語ったほうがいいですか？」

「お願いします」

「甘いものには目がないです。若いころはそうでもなかったんですけどね。最近は歯止めがききません。ダイエットはあきらめました。今日は果たして自分がこの機械に座れるのか少し不安でした」

「わかりました。質問は以上です。結果が出ましたらご連絡します」

瀬木さんは手首の黒い布を取った。



## 感情を測る機械

---

「やっぱり納得いかないのですが、こんなことで何かわかったんですか？」

「そうですね」

瀬木さんは機械をしまいながら、ゆっくと言った。

「今お話ししただけでも川口さんの性格というものは、だいぶわかります。それはおわかりですか？」

「そうですね」

私は自分が話したことを思い返してみた。

「ずいぶんとうが立った、いやなおばさんだと思います。太っているし、何のとりえもないです。一言でいえば平凡です」

「そうですね」

瀬木さんは言った。

「でもこの機会に興味を持ってくださる方は結構いるんですけど、わざわざ本当のところどうなのか、見に来てくれる人はあまりいません。科学者やその道の人とは別にして。そういうところが川口さんの持ち味なのではと私は思いますけど」

「うーん、まあそうなのかもしれません。でもそれくらい、自分でもわかりますね」

「そうです。ここからがこの機会の真骨頂なのです。それでは結果がでましたら、またお会いしましょう」

私はやっぱり腑に落ちないまま研究センターを後にした。

数日して、私はまたセンターに行った。部屋には瀬木さんだけがいた。感情を測る機械は消えていた。

「何かわかりましたか」

瀬木さんは巻物状の紙を眺めていた。そこには昨日の波状の線では無く、様々な色が移ろいうねっているのだった。

「私の専門はこのデータを読み解くことです」

瀬木さんは言った。

「読み解く。一体どうやってそんなことができるんですか？」

「私はアンドロイドなんです」

私は瀬木さんを見た。

「え？」

「アンドロイド。人型ロボット」

「だって……」

「そうですね、川口さん。ここから読み取れるのは」

私は反射的に席を立った。